

| | |
|----------|--|
| 氏名 | 陳 新妍 |
| 学位 | 博士 |
| 専門分野の名称 | 文学 |
| 学位授与番号 | 博甲第 4657 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 24 年 9 月 27 日 |
| 学位授与の要件 | 社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当) |
| 学位論文題目 | 陳述的文法形式の形成と展開 —発話動詞の条件形・譲歩形の文法化— |
| 学位論文審査委員 | 主査・教授 宮崎 和人 教授 辻 星児 准教授 京 健治 教授 栗林 裕 |

学位論文内容の要旨

本論文は、本来、人間の発話行為を表す動詞が、その特定の用法において陳述的な文法形式へと進化する現象を取り上げ、そのディスコースにおける表現価値について論じたものである。中心的な考察対象は動詞「いう」の条件形と譲歩形であり、これらが引用文をとる場合と副詞句をとる場合について考察されている。「はじめに」では、目的と方法を述べ、第 1 章(序論)では、「いう」の語彙的な側面と文法化の全体像を眺め、本論である第 2 章と第 3 章では、それぞれ条件形と譲歩形について考察し、第 4 章では、理論的な面から総括を行い、終章で結論と課題を述べる、という構成になっている。考察に用いたデータは、朝日新聞データベース、国立国語研究所が提供する書き言葉均衡コーパス(BCCWJ モニター公開版)のほか、小説数十作品から採集した大量の実例である。

本論部分である第 2 章以下の考察内容は以下のようなものである。第 2 章前半では、まず、「100%安全であるかといえば、そうではない」のように、発話動詞の条件形が引用文を受ける場合は、その句は疑問文であることがほとんどであることを指摘し、引用文が yes/no 疑問文である場合と wh 疑問文である場合に分けて考察している。yes/no 疑問文を引用文とするケースについては、これを一種の否定文として分析し、この構文の条件節がさらにその内部に「P ならば Q」という論理関係を含んでいること、それが成り立っていないように見える場合でも、P は先行文脈内に存在すると見なせることを指摘している。これによって、ワケデハナイと同じく、ディスコース世界で働く否定文と位置づけることが可能になっている。次に、「何にお金がかかるかといえば、人件費」のような wh 疑問文の場合についても、この構文のディスコース志向性に着目し、先行文脈との関係やテキスト構成の観点から、この構文を特徴づけている。

続く考察対象は、「総理大臣といえば国民のトップである」のような名詞句を引用する条

件形の用法である。ここでは、引用されるのが名詞句であると同時に、帰結部もまた名詞句であることが多く、それらは実質的にコピュラ文（名詞文）であると指摘し、西山佑司氏の分類基準に従って「N₁といえばN₂」の意味構造を分析した結果、倒置指定文、措定文、倒置同定文、倒置同一性文、定義文にあたるものが存在することを明らかにした上で、それらのディスコース内での機能について論じている。例えば、倒置指定文とは、「犯人はあの男だ」のように、主語名詞句が非指示的な変項名詞句であるものであるが、「世界的に有名な映画監督といえば〇〇だ」のような構文は倒置指定文と同様の意味構造を有している。また、主語名詞句が指示的である場合も、「家茂といえば家定の次の将軍だ」のように、主語名詞句の指示対象について「それは何者か」を問題にしておき、主語名詞句は意味的には命題であると解釈できる。主語名詞句に含まれる変項の値や指示対象を同定する情報等をその場で探索するという手続きを「いえば」が表しているといえよう。

第2章の後半では、「正直にいえば」や「そういえば」のように、副詞句を受ける発話動詞の条件形が陳述語・接続語に移行する現象を記述し、「いうと」「いったら」など、「いえば」以外の条件形の用法を概観している。

第3章は、「いっても」「からといって」などの譲歩形を扱った部分である。この章では、まず、先行研究がこの用法の多様さ・複雑さを十分に記述できていないことを指摘し、それを整合的に記述するために、この構文にかかわる要素を<前件P><Pからの推論の帰結であるQ><Qの代案であるQ'><Pの代案であるP'>に分けて分析している。これらの要素の組み合わせによって、「いっても」には、「反白人主義といっても、すべてのアメリカ人を敵に回しているわけではない」のような「PからQを導くことを否認して、Q'を導入するもの」と「若いといっても仁木議員は衆院議員」のような「Pに注目するだけでは不十分とし、P'を導入するもの」があることを見出している。さらに、前者については、「メタ言語レベルの否認」「認識的な帰結の否認」「当為的な帰結の否認」に分かれ、後者については、「P'がより重要な代案である場合」と「P'がPに対する異議である場合」とに分かれることを指摘している。譲歩形が陳述語や接続語に移行する現象を見た後、第4節では「いっても」以外の譲歩形を取り上げる。考察の中心は、「いっても」と「からといって」の比較である。両者の重要な相違点として、「からといって」は、P、Q、Qに対する否定のすべてが揃っているのに対して、「いっても」はそうではなく、むしろ、Q'の導入が重要であるということを示している。

第4章は、文法化（grammaticalization）の観点からの理論的な考察である。第2節では、トラウゴットの指摘する、意味・形態・統語・機能の面に見られる文法化の一般的な傾向に照らして、この論文で見ている発話動詞の用法が文法化の結果であることを確認している。第3節は、発話動詞の条件形の文法化を動詞のモーダル化の現象の一種として、認知意味論の立場から中右実氏の提唱する階層意味論の枠組みを援用して、その位置づけを検討している。その結果、思考動詞や知覚動詞の条件形が命題態度の階層で働き、Sモダリティに移行しているといえるのに対して、発話動詞の条件形は発話態度の階層で働き、D

モダリティに移行しているという結論に達している。

学位論文審査結果の要旨

論文審査会は、主査の宮崎および副指導教員で言語学が専門の辻教授、同じく副指導教員で国語学が専門の京准教授に、言語学の栗林教授を加えた4名が審査委員となり、6月28日夕刻に約2時間にわたって開催された。審査会では、まず本人から、本論文の概要および予備論文からの改善点などについての説明があり、その後、各審査委員から、具体的な質問やコメント、アドバイス、誤植の指摘などが行われた。

原稿の分量は、400字詰め原稿用紙換算で、約374枚になる。本論の中心的な部分を構成する3編の論文のうち、2編は紀要論文として公表済み、もう1編は投稿中であるが、その部分については、日本語学会全国大会で研究発表を行っている。審査会において確認された本論文の価値は、以下の通りである。

助詞や助動詞のような文法形式については、すでに夥しい研究があるのだが、文の文法的な側面に関係しているにもかかわらず、構文の中に存在していて、文法的形態素として切り出すことのできない表現が数多くあり、これらは、慣用的な表現として、文法研究では軽視されてきた。このような表現に光を当てるきっかけとなったのが文法化理論の登場である。語彙的な要素はある使われ方の中で徐々に文法的な側面を獲得し、それが次第に強化されていくという理論である。この理論によれば、語彙的なものと文法的なものとの中間領域が存在することは、言語の常態的・本質的なあり方であるということになり、そうした領域に積極的にアプローチする必要性があることになる。本論文は、このような問題意識を踏まえ、様々なテキストにおける発話動詞の条件形・譲歩形の使用実態の大規模な調査を通じて、これらが文法化されて文の陳述的な側面の表現になっている、あるいはなりつつある、その諸相を詳細に観察し、網羅的に記述している。論文内に引用した用例は313例だが、実際に目を通した用例はその数倍に及び、そのすべてがカード化されている。用例の観察においては、珍しい例を探すのではなく、言語使用の中で繰り返し適用されているスキーマを発見することを心がけており、そのために、表面的な文字通りの意味を越えて、書き手の意図のようなものにまで観察が及んでいる。発話動詞の文法化としては、伝聞や連体の「という」に注目が集まっているが、条件形の文法化をこのように組織的に論じた先行研究はないと思われる。また、本論文の方法論上の特徴として、従来の複合辞研究のように、「といえは」といった要素を仮定するのではなく、あくまでも構文という見方を貫徹することによって、否定文やコピュラ文の研究との接続が可能になっている点や、用例の観察がディスコース構造の中で行われていることが豊かな言語事実の発見につながっている点も、高く評価できる。自分の仮説に用例を当てはめていくような恣意的な議論ではなく、用例にあるがままの事実を語らせる、誠実な記述のしかたにも好感が持てる。

以上のように、評価できる面が指摘される一方で、問題点として、以下のようなことも

指摘された。文法化の基準の適用が最後の方で行われているが、文法化しているものを対象としているのだから、それは最初に行うべきではないかということ、トラウゴットの理論を適用するだけでなく、逆に、本論文の考察を通じて、その妥当性を検証することもあってよかったのではないかということ、中心的な部分は記述が詳しく文章も丁寧であるが、周辺的な部分には荒いところが見られること、構成や体裁について、もう少し工夫が必要であること、などである。こうした問題点はあるものの、いずれも本論文の本質的な価値を減ずるものではない。アドバイスとしては、使用頻度も加味して議論を強化してはどうかということや、コーパス言語学の手法を取り入れ、形態素の共起関係を統計的に調査して見てはどうかということ、「かといって」「とはいっても」のような二次的な文法化も興味深く、ぜひ今後の課題としてほしいこと、などが指摘された。

以上のように、様々なコメントが提出されたが、最終的に、総合的な評価として、本論文は、学位授与の基準を満たす価値ある論文であることを、審査委員全員一致で確認した。